

シュテファン・ゲオルゲ『架空庭園の書』

松 尾 博 史

松 山 大 学
言語文化研究 第29巻第1号（抜刷）
2009年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 29 No. 1 September 2009

シュテファン・ゲオルゲ『架空庭園の書』

松 尾 博 史

1. は じ め に

『架空庭園の書』(Das Buch der Hängenden Gärten)¹⁾は、1893年夏から1894年夏にかけて書かれ、「芸術草紙」(Blätter für die Kunst)第2巻第1号(1894年1月)に一部発表された後、『牧歌と頌歌の書』(Das Buch der Hirten- und Preisgedichte),『伝説と歌謡の書』(Das Buch der Sagen und Sänge)と併せ1895年にベルリンの芸術草紙社から200部限定の私家版として発行された。公刊版はベルリンのボンディ社から1898年11月に発行されている。

詩集の体裁によって、この詩集は三部構成であることが示されている。„Wir werden noch einmal zum lande fliegen“ から „FRIEDENSABEND“ にいたる10詩が第一部, „Unterm schutz von dichten blättergründen“ から „Wir bevölkerten die abend-düstern“ にいたる15詩が第二部, „Des ruhmes leere dränge sind bezwungen“ から „STIMMEN IM STROM“ にいたる6詩が第三部であり、全部で31の短詩が纏められている。

詩集全体は、一種の枠構造をなしている。第一部と第三部が枠を構成し、枠に囲まれた第二部は独自の詩圏をなしている。この第二部はイーダ・コブレンツにより「セミラミスの歌」(Semiramislieder)と呼ばれ、アーノルト・シェーンベルク (Arnold Schönberg) によって歌曲「シュテファン・ゲオルゲ『架空

1) テキストは George, Stefan: Sämtliche Werke in 18 Bänden. Bd. 3. DIE BÜCHER DER HIRTEN- UND PREISGEDICHTE DER SAGEN UND SÄNGE UND DER HÄNGENDEN GÄRTEN. Hrsg. v. d. Stefan George Stiftung. Klett-Cotta: Stuttgart 1991 (以降 SW3) を底本とし、翻訳に際しては、富岡近雄訳『ゲオルゲ全詩集』, 郁文堂, 1994年を参照した。

庭園の書』からの15の詩」(Fünfzehn Gedichte aus „Das Buch der Hängenden Gärten“ von Stefan George. Gesang und Klavier, Op. 15, 1909)として作曲されたことで知られている²⁾

『三つの書』の序文では、この詩集は「三大教養世界」(unsere drei grossen bildungswelten)のうちオリエントをその詩の場としているが、現実の環境(die (...) wirkliche umgebung)すなわち「われらが崇拜する都市の官能的な空気」(die sinnliche luft unserer angebeteten städte)に触発されたものでもあるとされている。「これら三作品のなかでは何らかの歴史上あるいは発展史上の一節の形象は全く描かれていない。ここにあるのは仮初めに別の時空に逃れ、かの地に身を委ねた魂の反映である。」³⁾この序文は一方で正確でもあり他方でゲオルゲ特有の韜晦も含んでいる。序文が記すとおり、この詩集で意図されているのは、一定の歴史的な時代の再現ではない。しかし別の時空に逃れねば書きえない「官能的な」「現実」とは、複数の都市ではなく、詩人の故郷である小さな町ビンゲンで生じた、イーダ・コブレンツとの不幸に終わった「恋愛」経験であったことはつとに知られている。その経験は、『アルガーバル』以降の不作からゲオルゲを抜け出させ、『三つの書』と『魂の一年』となって結実する。しかしその経験は詩人にとっては脅威であり、歴史的な仮面を被り、場をオリエントに仮構することによってしか表現することができなかったのである。

小論ではまず、『架空庭園の書』の背景となっている3つのポイント、即ち、イーダ・コブレンツ体験、架空庭園の伝説、オリエンタリズムについて触れた後、各詩の評釈を行う。そのうえで、『架空庭園の書』で描かれているのはど

2) シェーンベルクの歌曲については、Dümling, Albrecht: Die fremden Klänge der hängenden Gärten. Kindler: München 1981, 特に第4章「アーノルト・シェーンベルクの新音楽への移行に果たしたリートと抒情詩の役割」第5章「シェーンベルクの『架空庭園の書』終点か始点か?」, 塚越敏:「架空庭園」－シェーンベルクとゲオルゲ－1-3, 『音楽芸術』44-11 (1986.11), 66-71 頁; 44-12 (1986.12), 70-74 頁; 45-1 (1987.1), 67-71 頁, および岡部真一郎「爆発を続ける庭園－シェーンベルクのゲオルゲ歌曲集《空中庭園の書》」, 『ユリイカ』青土社, 1996年4月号, 235-243 頁を参照。

3) SW3, S. 7.

のような世界なのかを論じる。

2. 『架空庭園の書』の背景

2.1. イーダ・コブレンツ

イーダ・コブレンツ (Ida Coblentz 1870-1942) は、ゲオルゲの故郷でもあるライン河畔の町ビンゲンに定住していた富裕なユダヤ人一家の三女として生まれた。商業会議所会頭・商業顧問官である父ツァハリス・コブレンツは声望ある有力者であり、広大な屋敷をビンゲンに構えていた。ゲオルゲの父はワイン商から身を立て、後には市参事会員になったが、両家の社会的格差は明らかであった。コブレンツ家の斜め向かいにあったゲオルゲ家は、つつましい小さな家屋だった⁴⁾。

ゲオルゲの弟がイーダ・コブレンツに兄の処女詩集を紹介したことから、1892年3月にふたりは知り合うことになる。同年6月にビンゲンのコブレンツ家をゲオルゲは頻繁に訪ねているが、同年末にはリヒャルト・デーメルの評価をめぐって齟齬が生じる。当時ゲオルゲはホーフマンスタールに次のような手紙を書いているが、これはイーダ・コブレンツと関連している。「先ごろ濃い影が私の上を通っていきました。かつて私にとって大切であったひとが、今日では偉大なのか卑小なのか、高貴なのか低俗なのか分からなくなってしまったのです。」⁵⁾ それでもふたりは書簡を交わし、ゲオルゲはビンゲンに帰るたびに彼女を訪ね、ライン河の岸辺やナーエ川を散策し、コブレンツ家の庭を散歩した。1895年4月にイーダがベルリンの富裕な被服商レオポルト・アウエルバッハと結婚したことは、ゲオルゲに深刻な打撃を与えたが、それでもふたりの絆は切れなかった。同年8月にイーダは雑誌「パン」を編集していた

4) Cf: Dümmling, A: a. a. O., S. 83 f.

5) George an Hofmannsthal am 16. od. 23. Jan. 1893. In: Briefwechsel zwischen George und Hofmannsthal. 2. erg. Aufl. Hrsg. v. Robert Boehringer. Kupper: München u. Düsseldorf 1953, S. 56 f.

デーメルに、ゲオルゲの作品を推挙する書簡を送る。皮肉なことに、これをきっかけに、イーダとデーメルは知り合うことになる。ベルリンのアウエルバッハ家は、デーメルの紹介した若い芸術家たちのサロンとなる。1896年11月にゲオルゲがアウエルバッハ家のイーダのもとにいたときに、デーメルが彼女を訪ねてくる。彼女の部屋の敷居で、ゲオルゲとデーメルは頭をたれたまま無言ですれちがう。それ以降、ゲオルゲとイーダは疎遠となった。アウエルバッハとイーダは1899年10月に離婚し、1901年10月にイーダはデーメルとロンドンで結婚する。ゲオルゲの死後発表した手記で、イーダ・コブレンツは当時のことを次のように振り返っている。「わたしたちはお互いにとって大切であり、それぞれがそれぞれのあり方で唯一無二でしたーしかしわたしたちはお互いにとってまったく違う意味をもっていました。ゲオルゲは、そのつねに冷たい手のせいでわたしをぞっとさせたのですが、羊皮紙のような肌のせいで何か生あるものではないような感じを与えました。かれとともにいることを楽しむほどに、その本質にある僧侶的なものがわたしに強い印象を残しました。かれはわたしのことをまったく違った風に感じ取っていました。そのことはかれの詩からも、かれの手紙からも、また他のひとに語り、ずっと後になってわたしが知ることになったかれの発言からも見て取れます。いまでもわたしはかれが保った繊細で賢明な慎みに感謝しています。かれ自身、魅かれていたことをほんのわずかに仄めかすだけでも、わたしたちのつながりが壊れてしまうとおそろく感じていたのです。」⁶⁾

2.2. 架空庭園の伝説

表題の「架空庭園」とは、新バビロニア帝国のネブカドネザル二世(Nebukadnezar II, 在位 v. Chr. 605-562)が王妃アミュティスのために建造し、

6) Ida Dehmel : Der junge Stefan George. Aus meinen Erinnerungen. In : Stefan George - Ida Coblenz : Briefwechsel. Hrsg. v. Georg Peter Landmann u. Elisabeth Höpker-Herberg. Stuttgart : Klett-Cotta 1983, S. 79 f. (Zuerst in Berliner Tageblatt, Nr. 306 (1. 7. 1935) u. Nr. 308 (2. 7. 1935), Abend-Ausgabe.)

後に世界七不思議に数えられた空中庭園を意味している。この庭園は伝説上のアッシリアの女王セミラミスによって作られたとも伝えられる。歴史上、セミラミスはアッシリアの王シャムシ・アダド5世（在位 BC 823-810）の妃サムラマトをモデルにしているとされる。伝説上のセミラミスは、半人半魚のシリアの女神デルケートと、人間の男のあいだに産まれたが、それを恥じたデルケートは男を殺し、娘を出産後に捨てた。捨て子は鳩の運んできたチーズと乳で生き延び、やがて羊飼いに見出され、育てられる。セミラミスは、成長後、その美貌を目にとめたアッシリアの宰相オアンネスの妻となり、夫にさまざまな策を与え成功させる。アッシリアのニノス王のバクトリア遠征に夫が参戦した際、夫に同行した彼女は、首都バクトラを攻めあぐんでいたニノス王に、自分に軍の指揮を任せれば一日でバクトラを落としてみせると豪語し、みずから山岳兵を指揮してバクトラを陥落させた。セミラミスの才智と美貌に驚嘆したニノス王は、オアンネスに娘と交換に妻を譲ることを強要し、断られると、眼を剝り抜くと威嚇した。絶望したオアンネスは自ら縊れ死に、セミラミスはニノス王の妃となった。ニノス王とのあいだに一子ニニアスをもうけた後、セミラミスは王を暗殺させ、自らアッシリアの王となり、ニネヴェに亡王の霊廟を建て、バビロンに城壁を築き、ユーフラテス河の両岸に架空庭園をはじめとする数々の城や宮殿を造営した。その宮殿で女王は淫蕩に耽り、美男を招きいれては交わり、殺害した。セミラミスはメディア、ペルシア、アルメニア、アラビアの反乱を鎮圧し、エジプト、リビア、アジアまで版図を広げたが、インダス河での敗戦で負傷し、祖国に帰還した。予言どおり息子ニニアスが謀反を謀ったとき、セミラミスは譲位し、白い鳩の姿となって昇天したという（ギリシア語の「セミラミス」とは「鳩からきた者」の意）⁷⁾

ゲオルゲの描く架空庭園は、都市の中の広大な建築とは言いがたく、また、

7) 澁澤龍彦「バビロンの架空園―失われた庭を求めて」『ユリイカ』青土社、1996年4月号、150-166頁、および高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店、1967年、141-142頁を参照。

その女主人の形姿も性格もほとんど描写されない。その点で同じくセミラミス
を題材としたヴァレリーによる「セミラミスのアリア」とは大きく異なる。

2.3. オリエンタリズム

ゲオルゲが利用したのは、上記の架空庭園ないしセミラミスの伝説というより
は、「架空庭園」というタイトルが想起させる古代然としたオリエントの表
象であり、それが解放してくれる放恣な愛欲、戦闘と略奪、むき出しの権力と
残虐さ、絢爛たる色彩と暗黒である。ヨーロッパのオリエント像という「思考
と感情の共同体」についてサイドは次のように語っている。

オリエント（中略）にまつわることごとくが危険な性の魅力を発散してお
り、それらは（中略）、過度に「自由な性的交渉」によって、健康と家庭
生活にふさわしい節度とを脅かしていたのである。

しかし、脅かすものは性の魅惑以外にもいろいろと存在していた。それ
らのすべての脅威が、時間・空間・個々人のアイデンティティーについて
のヨーロッパ的明晰さと合理性を摩耗させた。オリエントに在ることによ
って、人は突如として、想像を絶する古代性、この世のものならぬ美し
さ、無限の距離といったものと対峙することになったのである。これらは、
直接的な経験の対象としてではなく、思考と叙述の対象とされる場合に、
いわばいっそう無邪気に利用される可能性を秘めていた。バイロンの「異
端外道」、ゲーテの『西東詩集』ユゴーの『東方詩集』においては、オリ
エントは解放の一形式であり、独創的な機会に満ちたひとつの場所であつ
て、その主旋律はすでにゲーテの「移住」^{ヘジラ}のなかでかなでられていた⁸⁾。

そのようなオリエント像は、フランス・ロマン派、象徴主義を通してさらに

8) エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』上、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀
子訳、平凡社（平凡社ライブラリー 11）、1993 年、381-382 頁。

醸成される。

そこでは、エキゾチックな場所のイメージ群、(プラーツが苦痛淫楽症 *algolagnia* と呼ぶ) サド＝マゾ趣味の涵養、死の恐怖や運命の女の観念や秘教的神秘主義〔オカルティズム〕によって喚起される魅惑的陶醉などが混然一体となってゴージェ (彼自身オリエントに魅せられていた)、スウィンバーン、ボードレール、ユイスマンスらの文学作品を産み出す土壌を形成していた。ネルヴァルとフローベールにとって、クレオパトラ、サロメ、イーシスといった女性像は特別の意味をもっている。オリエントに題材をとった作品のなかで、またオリエント旅行において、彼らがこうした伝説的で、含蓄に富み、豊かな連想を誘う女性の類型をきわめて高く評価し、その価値をいっそう高らしめたというのも決してゆえなきことではないのである⁹⁾。

フランス象徴主義の洗礼を受けたゲオルゲにとっては、プラーツが纏め上げた「宿命の女」の主題はおなじみのものであった。そこでは「エグゾティック (異国趣味) の理想と、エロティックの理想とは、連れ立ち伴うものである。このことは同じくらいに明白なもうひとつの真実を証明している。すなわち、エグゾティックなものへの愛は、概して性的欲求を想像の領域に投影したものだ、ということである。(中略) 彼らは、ありとあらゆる放縦な欲望を充たし、残酷きわまる思いつきを実現することのできる、野蛮な古代東方の世界を、夢想の中で訪れるのである。』¹⁰⁾ しかしゲオルゲはこの宿命の女そのものを主題としたのでない。逆に、ほしいままの暴虐と陵辱と支配ののち、宿命の女と出会い、愛欲に溺れたすえ、没落する若き専制君主を、この詩集は主題としている。

9) エドワード・W・サイド、同書、411-412 頁。

10) マリオ・プラーツ『肉体と死と悪魔 ロマンティック・アゴニー』倉智恒夫他訳、国書刊行会 (クラテール叢書 1)、1986 年、258 頁。

枠の前半部となる第一部は 10 篇の詩によって構成されている。

Wir werden noch einmal zum lande fliegen	もう一度かの地へ飛びたとう
Das dir von früh auf eigen war :	かねてよりおまえのものだったところへ。
Du musst dich an den hals des zelters schmiegen ·	馬の首にとりすがり、
Du drückst an seinen zäumen den rubin	轡の紅玉を押しつけるのだ
In einer heissen nacht und ohne fahr	熱い夜 危なげなく
Gelangst du hin.	おまえはかの地へ辿り着く。

夜を徹しての騎行ののち、かれは「かの地」に到達する。

Als durch die dämmerung jäh
Breite röte sich wies ·
Balsamduft mich umblies ·
Kannst ich die freundliche nähe :
Stammes boden und mauern.

さしそめた曙光にたちまち
赤いひろがり^が退いたとき、
香油の薫りが吹きめぐり、
親しいものの近まりを知った、
一族の大地と城壁を。

11) Arbogast, Hubert : Das Buch der Hängenden Gärten. In : ders : Versuche über George. Verein der Freunde der Akademie für gesprochenes Wort. Stuttgart 1998. S. 85 ff.

Stolz und mit glücklichem schauern	誇らしく幸福な戦慄とともに
Wandel der seele geschah	魂の転換が起こったのだ
Als ich die üppig und edel	最初の棕櫚の鬱蒼とした高貴な葉が
Zu mir sich neigenden wedel	わたしの方へ垂れているのを
Erster palmen wiedersah.	ふたたび目にしたときに。

そこは近しいものの領域、彼の一族の発祥の地である。そこに到達するとき、彼には「魂の転換」が生じた。詩的自我は王、支配者に転じるのである。10行1節、主に3揚格によるこの詩は、すべて揚格に始まるが、抑格は不規則であり、最終行は4揚格をもち、脚韻はaBBaccDeeDという変則の彷徨韻Schweifreimをなしている。

Kaum deuten dir gehorsam offne bahnen	従順に開かれた道が 憧れの最高位への道程を
Nach den ersehnten höchsten stufen ·	おまえに示すやいなや、
Als der gewölbe beute· stahl und fahnen ·	円蓋の部屋の略奪物、銅や旗が、
Betäubend dir entgegenrufen :	目眩めくようにおまえに呼びかけた、
Von säulen die im schutte dampfen	瓦礫のなかで霏をあげる円柱について
Von schwertern die von staub und purpur kleben ·	塵や緋色にねばりつく剣について、
Talaren drauf die rosse stampfen	馬に踏みしだかれる法服や
Und armen die begeistert sich erheben.	熱狂して差し上げられる腕について。

Dazwischen bebt ein tiefer laut :	そのあいだに深い声ふるえる。
Vergiss mit uns im bund	われらと結び合い おまえに
Die würde so dir anvertraut	委ねられた位階を忘れ
Und küsse froh den grund	朗らかに大地に接吻せよ
Wo gold- und rosenschein	やさしい願いの黄金と薔薇の
Der weichen wünsche frevel süht ·	輝きが悪業を贖ってくれ、
Den grund auf dem allein	甘い種がこの世で緑に芽ぐむ
Die süsse saat hienieden grünt.	大地に接吻せよと。

この第3詩は、第2詩で示唆された支配者への転換がもたらすものを示している。それは最高の位階ではあるが、円蓋の部屋に積まれた戦利品の山は、支配の背面である、戦乱と破壊、蹂躪と略奪、殺戮と熱狂を物語る。しかしそのとき聞こえてきたのは、支配の愉悦にとらわれることなく、大地との結びつきを求めよと訴える「深い声」である。大地との結びつきにおいて「やさしい願い」によって悪業は贖われ、甘い種が緑となる、と。第1節では「至高の位階」die höchsten stufen, 「円蓋」gewölbe, 「旗」fahnen, 「円柱」säulen, 「靄を上げる」dampfen, 「熱狂して差し上げられる腕」armen, die begeistert sich erhebenなど上方向の語彙が多く並べられる。第2節では逆に、「深い声」ein tiefer laut, 「大地」der grund, 「種」die saatなど、下方へ向かう語彙がそれに対置される。8行2節で全てヤンプス詩行だが、第1節は4～5揚格ですべて女性韻による交叉韻なのに対して、第2節は3～4揚格と詩行が短縮され、すべて男性韻による交替韻であり、形式上の変化により「おまえ」を誘引する二つの志向の対立が表現されている。

In hohen palästen aus dunklen und schimmernden quadern
 In bauschenden zelten die himmlische gaben bescheeren
 Verschönert des liches von oben ergossene flut
 Die leiber vom weiss des marmors mit bläulichen adern
 Vom saftigen gelb der reife-beginnenden beeren -
 Die leiber die hellrot wie blüten und hochrot wie blut.

Da ich mich von ihnen zu trennen beschloss um ein reines
 Erhabnes geniessen berauscher sieges-gebräuche :
 Vorscheuch ich den gram der mich abermals leise bestahl
 Mit hülfe der blumigen sprühenden geister des weines?
 Erhebt von dem schläferndern pfühl der basilien-sträuche
 Mich meiner gewappneten schall im erwachenden strahl?

ほのかに光る黒い角石の聳えたつ宮殿のなか
 天の賜物をもたらしてくれる膨らんだ天幕のなかで
 天上からあふれでとうとうたるひかりが
 青い血管を浮かべた大理石の白い肉
 熟れはじめた葡萄のみずみずしい黄の肉
 花ばなの輝く赤 鮮血の赤の肉をより美しくする。

わたしは陶醉させる勝利の儀式の純粹高貴な享受のため
 それらから別れることを決意したのだ。
 葡萄酒の香しい迸る精気のたすけを借り
 何度も微かにわたしの心を盗んだ悲嘆を追い払おうか？
 バジルの藪の心地のよい褥からわたしを引き起こすのは
 目覚ませるひかりの中のわが紋章を帯びたる者たちの轟か？

宮殿においても遠征先の天幕の中でも、さまざまな肌色の女たちが「私」にかしづく。鋼の武器や戦旗といった男性的な戦利品にかわり、女奴隷たちのさまざまな肌色が並べたてられたあと、「勝利の儀式の純粹かつ崇高な享受」の名のもとに否定されるという点で、この第4詩は、直前の第3詩と同じ構図を示している。肉欲への惑溺、悲嘆、安逸に、勝利の儀式、葡萄酒の精気、戦士たちの立てる響きが対置される。しかし形式的には第4詩は前の詩と比べて安定している。この6行2節の詩は、ほとんどがアナペースト5揚格であり（第1節の第4・5行は例外）、脚韻も abCabC という安定した組み合わせ韻を示している。「わが紋章をおびたる者たちの轟」という第4詩の最終行に示される戦士たちの闘いの声のイメージは、第5詩に引き継がれる。

Nachdem die hehre stadt die waffen streckte ・
 Die breschen offen lagen vor dem heer ・
 Der fluss die toten weitertrug zum meer ・
 Der rest der kämpfenden die strassen deckte

莊嚴な都市が矛を収めた後、
 城壁の裂け目は軍勢の前に開かれたまま、
 死者たちを海へ運ぶ河、
 街路を埋めつくす戦士たちの遺骸

Und der erobrer zorn vom raube matt :	侵略者たちの怒りも略奪により和らいだ頃、
Da schoss ein breites licht aus wolkenreichen ·	垂れこめた雲間からひろびろとひかりが射し、
Es wanderte versöhnend auf den leichen ·	屍体の上を宥めるように彷徨い、
Verklärte die betrübte trümmerstadt	悲しみに沈んだ瓦礫の街を清め

Und haftete verdoppelt an der stelle	あの場所では倍も照り輝いたのだった
Wo der Bezwinger durch die menge stob	そこはあの征服者が群衆の中を駆け抜け
Der kühn dann über eines tempels schwelle	大胆にも神殿の入口で 神に向かい
Die klinge rauchend zu dem gotte hob.	湯気の立つ剣を突き上げたところ。

「荘厳な都市」die hehre stadtとは、最終節の「神殿」を中心とする征服された都市のことである。降伏後、城壁には大きな穴が開き、侵略者は街を劫掠し、死者は河に流れ、街路には戦士たちの遺骸が依然としておびただしく放置されている。廃墟となった街を雲間から太陽が照らす、ひとときわ光り輝くように見えるのは神殿の入り口の辺りである。征服軍の軍勢の間を通過して、征服者である王は神殿の入り口に殺到し、異郷の神に対して、いまだ血潮の湯気の立つ剣を突き上げた。この神聖冒瀆はしかし、陽光の描写によって肯定的に描かれている。この詩は、4行3節、ヤンブス5揚格で、1・2節は抱擁韻、最終節は交叉韻となっている。この詩で戦乱の収束を描いた後、詩のトーンは回顧的、内省的になる。

KINDLICHES KÖNIGTUM

子供の王国

Du warst erkoren schon als du zum throne	汝は既に選ばれていた 王座のため
In deiner väterlichen gärten kies	その輝きに自ら頭を讃える王冠のため
Nach edlen steinen suchtest und zur krone	父の庭園の小石の中に
In deren glanz dein haupt sich glücklich pries.	貴石を探していたとき。
Du schufest fernab in den niederungen	汝は遙か離れた低地の
Im rätsel dichter büsche deinen staat ·	密集した藪の神秘のうちに汝の国を創った、

In ihrem düster ward dir vorgesungen	その暗がりのなかで汝のために歌われたのは
Die lust an fremder pracht und ferner tat.	異邦の絢爛と遠方 ^{いさか} の熱し。
Genossen die dein blick für dich entflammte	汝の眼差しが汝のために燃え上がらせた同志に
Bedachtest du mit sold und länderei ·	汝は報酬と封地を与え、
Sie glaubten deinen plänen· deiem amte	彼らは汝の計画と、汝の任務を信じた
Und dass es süß für dich zu sterben sei.	汝のために死ぬのは甘美であることを。
Es waren nächte deiner schönsten wonnen	あれは汝の至福の夜々
Wenn all dein volk um dich gekniet im rund	汝の民は皆 汝の周りに輪になって跪き
Im saale voll von zweigen farben sonnen	差し交わす枝 色彩 太陽に満ちた広間で
Der wunder horchte wie sie dir nur kund.	汝だけが知る不思議に聞き耳をたてた。
Das weisse banner über dir sich spannte	白旗は汝の頭上にはためき
Und blaue wolke stieg vom erzgestell	誇りに燃える汝の頬と
Um diene wange die vom stolze brannte	厳しい天の輝きの汝の額をめぐり
Um deine stirne streng und himmelhell.	銅の炉床からは青煙が立ち上った。

梓前半第一部の中心をなすこのヤンプス5揚格、4行5節、男性・女性交叉韻の第6詩は、幼少時への追憶の形をとって、「汝」の権力意思が幼時に遡ることを描いている。王になるべくして生まれついているという強烈な選良意識は、家の庭での小石拾いという幼い遊びにも現れ、やがて葦原での「子供の王国」の建国に至る。王と臣下を結びつけるのは、歌と、言葉である。「王」のために「歌われた」のはオリエンタリズムの絢爛と遠征の夢である。その言葉の不思議によって、「王」は低地の藪のなかの夜の「王国」を「枝々と色彩、太陽に満ちた広間」に変容させ、「臣民」はその言葉に聞き入る。また、「王」はその容姿によって王者たる刻印を得ている。その「眼差し」によって「王」は同志を熱狂させ、死をも厭わない忠誠心をかちえる。その頬は誇りに燃え、額は厳しく、天上の輝きを帯びていとされる。

つとに指摘されているように、この詩はゲオルゲの幼年時代と関連してい

る。モルヴィッツは次のように記している。「同級生だったユリウス・ジーモンの思い出によって分かっているのだが、8歳の児童だった頃、ゲオルゲは独自の国を創った。その国は邪魔されことなく内的な声に耳を澄まし、将来の偉業と異国の豪奢を夢見るために、ナーエ川の河川敷に灌木と葦によって周りの世界から隠されていた。その当時かれには、自分の計画を信じ、後に『第七輪』の「カール・アウグスト・クラインに宛てて An Carl August Klein」や「誓い Der Eid」に描かれているようなありかたで彼に従おうとする仲間がいた。」¹²⁾しかし同じ回顧を基にしたベーリンガーの伝える像は、これとは異なっている。

ゲオルゲはその当時エティエンヌと呼ばれていたのだが、ジーモンとゲオルゲがおよそ9歳の子どもだったころ『王国』Königreichを建国し、王国のためにゲオルゲは独自の切手を構想した。ユリウス・ジーモンはさらにこう報告している。

「私たちは交替で『王』と『総理大臣』になると取り決めた。臣下はいなかったし、臣下を得ようと努めたりもしなかった。午後、放課後になるといつも、私はシュテファンのところに駆けつけ、私たちは彼の家の大きな屋根裏部屋で空想に耽った。およそ4週間たって、取り決めどおり、王位を継承し、シュテファンを大臣の地位に降格しようとしたところ、彼はそれを拒否した。彼はその王座を諦めようとはしなかったのだ。しかし臣下がいないので、臣民に意見を聞くことも、その影響下に白黒をつけることもできなかった。私はとうに他の遊び友だちのことが恋しくなっていたので、他の仲間とのもっと楽しい遊びのために、よろこんで私たちの王国を放棄した。シュテファンは休み時間にも私たちの遊びにほとんど加わることはなかった。彼には向いていなかったのだ！ その当時から既に彼は

12) Morwitz, Ernst: Kommentar zu dem Werk Stefan Georges. Küpper: Düsseldorf u. München 1969. S. 95.

一匹狼だった。』¹³⁾

異なっているのは、王国の位置と、仲間の有無である。典拠¹⁴⁾を示したうえで、ユリウス・ジーモンの回顧を再掲したベーリンガーの記述に、より強い信憑性があることは疑いない。モルヴィッツの記事はむしろ詩の読解のために、ゲオルゲからの聞き書きと、ジーモンの回顧をない合わせて造られたもののように思われる。それは逆に、幼少の頃には実際は叶わなかった、信奉者たちを回りに集め崇拜されることが、詩人にとって切実な願望であったことを物語る。この詩はゲオルゲの幼少時代への回顧を源泉とし、それを詩の Hauptfigur の幼少時代への回想と重ね合わせるように作られている。

次の第7詩で、王は幼年時代への回想からはなれ、現在に還り、僧院の庭で白昼、夢想する。

Halte die purpur- und goldnen gedanken im zaum ・	緋と黄金の思いには手綱をつけよ、
Schliesse die lider	ライラックの木陰で
Unter dem flieder	眼瞼を閉じ
Und wiege dich wieder	ふたたび白昼の夢に
Im mittagstraum.	身をゆだねよう。

Vögel verstummt in den gärten auf blume und ast ・	鳥たちは庭の中 花や枝に黙し、
Mit kronen und reifen	冠や首輪や
Metallblauen streifen	青びかりする金属の縞模様の
Geringelten schweifen ・	巻毛状の尾をつけて、
Sie schaukeln zur rast.	ゆらゆら揺れて休んでいる。

Ferne schlagen die trommeln aus silber und zinn.	遠くで銀と錫でできた太鼓が鳴る。
--	------------------

13) Boehring, Robert: Mein Bild von Stefan George. Küpper: Düsseldorf u. München. 2. erg. Aufl. 1967. Bd. 1. S. 202.

14) Simon, Julius: In: New Yorker Staatszeitung und Herold. 7. Juni 1947, Nach Boehring, Robert: A. a. O. S. 300.

Doch keine klänge	でも どんな響きも
Nicht wechselgesänge	相聞歌も
Noch harfenstränge	竖琴の弦も
Beladen den sinn.	感覚の重荷にはならない。
Zierat des spitzen turms der die büsche erhellt ·	灌木林を照らす尖塔の装飾
Verschlungenes gefüge	もつれあった構造
Geschnörkelte züge	曲線模様の線が
Verbieten die lüge	本質と世界についての
Von wesen und welt.	虚偽を禁じる。

第3詩の「塵や緋色 purpur にねばりつく剣」という用法から、purpurgedankenとは血塗られた戦乱への思いを意味すると考えられる。征戦や王権の齎す栄光への想いから離れ、この詩は僧院の庭での午睡を du へと呼びかける。その庭で冠や輪飾りをつけているのは、王宮の人々ではなく鳥たちである。戦争や人事から隔離され、遠くから軍隊のものであろう太鼓や、宮廷の音楽が聞こえては来るものの、感覚は乱されない。「もつれあった構造／曲線模様の線」とはモザイクのアラベスクである。鳥たちをあしらった庭園の、タペストリーにも似た装飾的イメージは、アラベスクの曲線模様にまで抽象化され、最後の2行の、イスラム的な偶像崇拜の禁止の示唆に至る。5行4節のこの詩は、各節の第1行のみがダクテュルス5揚格で、2～5行目は2揚格でアウフタクトの有無も抑格の長さも不規則という変則的な詩形式が、AbbbA という抱擁韻によって繋ぎとめられている。

第7詩で描かれているのは王宮内の僧院の中庭という囲い地での安逸であるが、この守護された領域は、次の第8詩では鸚鵡の鳥かごへと極小化される。

Meine weissen ara haben safrangelbe kronen ·	わたしの白い鸚鵡たち サフラン黄色の冠で、
Hinterm gitter wo sie wohnen	格子の蔭がその住まい
Nicken sie in schlanken ringen	ほそい輪の中 うなずいて

Ohne ruf ohne sang ·	叫びもせねば 唄いもせず、
Schlummern lang ·	いつまでもまどろむばかり、
Breiten niemals ihre schwingen -	ついぞ翼も広げずにー
Meine weissen ara träumen	わたしの白い鸚鵡たち 夢見るのは
Von den fernen dattelbäumen.	はるかなナツメ椰子の森。

鸚鵡たちの「白」は第6詩で描かれていた幼少時の王の旗の色であり、safrangelbは現在の王の栄光の黄金色と通じる。それら王の色彩を帯びた鸚鵡たちはしかし檻の中に囚われ、もはや歌うこともない。安寧は怠惰なまどろみを齎すばかりで、飛翔のための翼ももはや役に立たない。残されているのは夢を見ることのみ、昔、自由だった頃の、故郷の森を思い出すことのみである。これらがすべて、王の鬱屈の象徴となっていることは言うまでもない。この詩は8行1節で主調はトロヘウスだが、1行目は7揚格、4行目はohneの繰り返しにより第2揚格のあとにツェズールをはさみ、ーーー||ーーーという詩行をなし、5行目は2揚格など、不規則な詩行構成であり、それをaabCCbddという特殊な抱擁韻で結びつけているという点で、第7詩での作詩法と類似している。

王の無聊を慰めるため、婚礼が準備される。

VORBEREITUNGEN

準備

Den jungen leib mit unversehrten reizen	瑕ひとつない魅惑的な若い肉体を
Soll man vom neumond ab mit milch und wein	新月からは乳と葡萄酒
Vom halben bis zum vollen schein	半月から満月までは
In einem bad von öl und salben beizen -	香油と没薬に湯浴みさせねばならぬー
Palast und schmuck und mägde seien dein !	宮殿も宝飾も侍女も御身のものとなろう！
Und priester die die hände auf dich legen	そして御身に両の手をかざす司祭たちは
Verrichten vor dir täglich einen segen.	毎日 御身のみまえて祝福を称える。

Auf dass du einer fürstin ähnlich siehst	王妃にも見まがうばかりに
Und auch in tiefer zucht	深く端正な振る舞いのなかに
Stumm in erwartung kniest ·	無言のうちに期待しつつ跪くのだ、
Dass reich und schwellend eine reife frucht	豊かにあふれんばかりの熟れた果実のように
Und eine knospe duftig zart	蕾のように香り高くしなやかに
Am fest der strenge meister dich gewahrt	祝祭の日に厳格な尊師が御身を認め
Und seiner würdig dich erkienst.	また尊師に相応しく御身を選ばれるように。
Und du selber? - liebst dich lang zu läutern ·	しかし御身自身は—穢れなき魔法の葉草で
Mit den reinen zauberkräutern	果てもなく身を清め 自らの心を
Deinen geist in einsamkeit zu schonen ·	孤独のうちに大切にすることを好まれるのか?
Ihn mit der erharrung schauer lohnen	待ちこがれた ^{おのの} 慄きがその心に報いよう
Bis der vorhang birst	あらゆる国々の精華の前で
Vor dem ausbund aller zonen -	^{とばり} 帳が破れるそのときまで—
Den vielleicht du nie berühren wirst.	その方に御身は決して触れえぬかもしれぬ。

この詩集で初めて **du** は王に対する呼びかけではなく、王の婚礼の相手として選ばれた女性に対して用いられる。婚礼をまえに、その肉体は選びぬかれた素材で磨きたてられ、司祭たちの祝福により清められる。彼女には宮殿と宝石と侍女たち、すなわち権力の物質的側面での褒賞が与えられることが約束される。高貴な家柄の娘のように見えるよう端正な振る舞いが要求されるのは、彼女の出自がそうではないことを物語る。また熟れた果実と同時に蕾である、という矛盾した魅惑が彼女には求められる。それがこの詩では「厳格な尊師」*der strenge meister*, 「あらゆる国々の精華」*der ausbund aller zonen* と呼ばれる王に選ばれる決め手だという推測の背景には、この王そのものがそのような矛盾を孕む存在だという判断があるだろう。最終節の「純粋な」*rein*, 「清める」*läutern*, 「孤独」*einsamkeit* などの語彙も、それが妃の候補に「あなた自身はそれを愛するのか」と問われるのは、その伴侶となるはずの王がそれを愛することの示唆と読み取ることができる。しかしこのような準備を経ても、彼女が得るもの

は、それまでヴェールによって隔離されていた聖なる伴侶と初めてまみえる期待の慄きだけかもしれない。その伴侶たる王に、彼女は触れることすらできないかもしれないのである。

形式上、7行3節有韻のこの詩は、最初の2節は主にヤンプス5揚格、最後の1節は主にトロヘウス5揚格で構成されている。内容的に、この第9詩は第4詩における女奴隷の忌避に対応するとともに、さまざまなものごと（この詩では浄化、洗練のための「準備」）を詳述したうえでそれを否定することによって、それらとは隔絶した（つまり、そのような意図的な「準備」によって到達できない）レベルにこの詩集の主人公である王を位置づけるという作詩上の手段を取っているという点で、第3詩、第4詩と共通している。しかし、「子供の王国」に見られるように、ある程度まで詩人自身と重なり合う点のある王の造形に際して、その妃候補と目されている女性をこのような形で「利用する」ことについては、暗然たる印象を禁じえない。逆にそのことが、枠と枠内の詩での女性への対し方の対照を生んでいることは指摘しておかねばならない。

次の第10詩は、第一部の締めくくりとなるとともに、第二部への橋渡しともなっている。

FRIEDENSABEND

平和の夜

Vom langen dulden sengend heisser stiche
Erholen sich die bleichen länderstriche

焦熱の刺傷の長い忍耐から
青ざめた地帯は癒えてゆく

Und wolken schwarz und schwefelgelb belasten
Die kahlen mauern und die starren masten.

漆黒の雲 硫黄色の雲が
荒れ果てた城壁 凝然たる旗竿に垂れ込める。

Die gärten atmen schwer von duft beladen ·
Die schatten wachsen fester in den pfaden.

庭園は臭気に満ち 苦しげに喘ぎ、
影はますますくっきりと小道に伸びる。

Die zarten stimmen schlummern und verstummen ·	かほそい声は止み、黙し、
Die hohen mildern sich in sanftes summen.	高い声もくぐもった眩きへと静まる。
Wie schemen locken nur die festgepränte	幻影のように誘惑するのはただ 祭の華飾
Die wilden schlachten lauten untergänge.	激しい戦闘 騒然たる没落。
Im dichten dunste dringt nur dumpf und selten	濃い煤煙のなか 時おりかすかに
Ein ton herauf aus unterworfenen welten.	隷属させられた世界から音が立ち上る。

2行6節ヤンブス5揚格対韻の整然としたこの第10詩で描かれているのは、戦争のあとの荒廃と、その荒廃から少しずつ癒えていく世界のありさまである。征服戦争によって隷属させられた国々には、戦争の傷跡が生々しく残っている。第1節では皮膚感覚、第2節では視覚、第3節では臭覚、第4節では聴覚イメージによって、戦争に敗れた国々の情景が描写される。幻影のように想いに浮かんでくるのは、かつての街の祭のきらびやかさ、烈しい戦闘、騒然たる没落のみである。しかし廃墟の中から生まれてくるものがある。それは一度は黙した声である。その声を掬い取ることができたのは、この詩が、詩集で初めて、いかなる形でも *Hauptfigur* を登場させず、征服され、隷属させられる側から、世界を描いているからである。視点の転換により、第一部に描かれていた王とその王国は逆の側から照射され、別の意味づけをされることとなる。

4. 第二部：「セミラミスの歌」

第二部の15の詩群は、それぞれ1頁の空白によって第一部および第三部と区分されている。また、第19詩と第20詩の間にも半頁の空白が置かれており、第二部が前半の9篇と後半の6篇に分けられることが示されている。

Unterm schutz von dichten blättergründen

厚く地を覆う葉むらに守られ

Wo von sternern feine flocken schneien ·	満天の星から細かい粒子が舞い下りるところ、
Sachte stimmen ihre leiden künden ·	微かな声が嘆きを洩らす、
Fabeltiere aus den braunen schlünden	寓話のけもの達が 褐色のあぎとから
Strahlen in die marmorbecken speien ·	ほとぼしる水を大理石の水盤に吐出す、
Draus die kleinen bäche klagend eilen :	そこから細かい水流が嘆きつつ急ぎ去る。
Kamen kerzen das gesträuch entzünden ·	いくつもの蠟燭が来たり 灌木に火を灯し、
Weisse formen das gewässer teilen.	白い形姿たちが水流を分かち

この第二部冒頭に置かれた、8行1節トロヘーウス5揚格女性韻の第11詩は、杵内詩 *Binnengedichte* の導入部として、第二部が展開する空間を描写する。そこは密集した樹々によって外界から守られた結界の地であり、星屑が雪のように舞い下りるように思われる天上と繋がる世界である。時は夜、密やかな声が嘆きをもらす。この第3行は、第一部の最終行「隷属させられた世界から音が立ち上がる」と照応している。褐色の石に刻まれた吐水口、大理石の水盤は、そこが泉をもつ庭園であることを示す。泉からは幾筋ものせせらぎが庭園に流れ、そこに蠟燭をもった白衣の人々が現れ、灌木に灯りを燈す。

Hain in diesen paradiesen	この楽園の森は
Wechselt ab mit blütenwiesen	花咲く草原、会堂、
Hallen· buntbemahlten fliesen.	色鮮やかに彩られたタイルに変わりゆく。
Schlanker störche schnäbel kräuseln	すらりとしたこうのとりが
Teiche die von fischen schillern ·	魚群の煌めく池を波立たせ、
Vögel-reihen matten scheines	鈍く輝く鳥が一列となり
Auf den schiefen firsten trillern	傾いた棟の上でさえずり
Und die goldnen binsen säuseln -	黄金色のイグサがサラサラと鳴るー
Doch mein traum verfolgt nur eines.	だが我が夢はたった一つのものを追う。

この第12詩もまえの詩と同じくトロヘーウス女性韻であり、揚格は5から4へと減少しているものの、韻律上の連続性を示している。「楽園」 *paradiese* と呼ばれるこの世界の内部へと、*ich* が徐々に歩み入るに連れ、風景は森から

草原，大きな建物，色タイルで装飾された邸宅へと変化してゆく。第11詩と同じく，コウノトリ，魚，池，トウシンソウ binse など，水にまつわる表象が重ねられる。しかし ich が追い求めてきたのはただひとりのひとである。

Als neuling trat ich ein in dein gehege	新参者としてわたしは御身の領地へ踏み入った
Kein staunen war vorher in meinen mienen・	御身を見るまでは感嘆の表情を浮かべたことも，
Kein wunsch in mir eh ich dich blickte rege.	熱い望みを抱いたこともなかったのに。
Der jungen hände faltung sich mit huld・	組み合わせられた若い両の手を惜め深くご覧あれ，
Erwähle mich zu denen die dir dienen	御身に仕える者のひとりにわたしを選び
Und schone mit erbarmender geduld	哀れみ深い忍耐をもっていたわりたまえ
Den der noch strauchelt auf so fremdem stege.	かくも見知らぬ小路でいまだ蹠く者を。

この第13詩の韻律は，第11・12詩のトロヘウスから，ヤンブス5揚格へと変化する。詩の内容も，情景描写から「御身」duへの訴えに変わっている。gehege とは囲い地，狩場のことである。この領域は，王である「わたし」の支配権が及ばない治外法権にある。その中では「わたし」は支配者ではなく，「御身」の信奉者たちと同列であるばかりか，「新参者」neuling となる。「わたし」は「御身」に感嘆し，熱い欲望を感じ，両手を合わせて懇願し，慈悲と忍耐を請う。第一部と同じなのは，対等の人間関係が成立しないことであり，第一部で支配者であったものは，第二部では奉仕者となる。立場は逆転しているが，支配・奉仕という構図は同一である。

Da meine lippen reglos sind und brennen	唇がこわばり 燃立つので
Beacht ich erst wohin mein fuss geriet :	初めてわたしはどこへ踏み入ったのかと考える。
In andrer herren prächtiges gebiet.	それは他の主人たちの壮麗なる領地。
Noch war vielleicht mir möglich mich zu trennen・	まだ恐らくその場を立ち去ることはできたらう，
Da schien es dass durch hohe gitterstäbe	そのとき高い格子の棧のあいだで
Der blick vor dem ich ohne lass gekniet	わたしが その御前でたえず跪いていた眼差しが
Mich fragend suchte oder zeichen gäbe.	問いたげにわたしを探すか 徴を送るよう思えた。

第14詩も、まえの詩と同じく7行1節、ヤンプス5揚格で構成されている。「わたし」は一瞬われにかえり、自分が他の支配者の領地に足を踏み入れていることに気づく。気づいたこの瞬間、「わたし」はその地を去ることもできたかもしれない。しかしそのとき、崇拝する彼女の眼が目に入る。その眼差しは、格子の影から「わたし」を探し、合図を送っているかのように思われる。この詩ではじめて、彼女と「わたし」のあいだには眼差しを交わすという相互的な関係が成立する。しかしそれも「格子」gitterstäbeを挟んでである。この格子は「わたし」と彼女を隔てる障害であり、また、彼女が別の「主人」の囲い者、囚われ人であることを示す。彼女もまた、この領地の女主人であると同時に「主人」に保護され、支配されるものでもある。その彼女に仕え、奉仕する「わたし」は、その名も知れぬ「主人」の位階からは二重に隔てられた、二重の被支配者という位置にある¹⁵⁾

そのような支配－被支配構造の下での執着は、被虐的な欲望へと昂まる。

Saget mir auf welchem pfade
Heute sie vorüberschreite -
Dass ich aus der reichsten lade
Zarte seidenweben hole ·

言ってくれ どの小道を
今日 彼女が歩むのかー
この上ない宝の詰まった櫃から
柔らかな絹織をとりだして、

15) 「他の主人たちの壮麗なる領地」という一行を読むとき思い出されるのは、この詩が書かれた3年後の1896年、コブレンツ家の庭で撮られた2枚の写真である („George im Garten des Hauses Coblenz Bingen 1896“ in: Boehringer, Robert: a. a. O., Bd. 2: Tafeln. S. 45.) イーダ・コブレンツの父、商業会議所会頭ツァハリス・コブレンツの屋敷は、「重々しく高い鉄の門に閉ざされた公園にも似た庭園の中に建っていた。食堂用の大広間の壁からは、黒い額縁の中から先祖達が家族の食卓に揃った一座の者たちを見下ろしていた。厳格に伝統が守られていた。」(Wegner, Matthias: Aber die Liebe. Der Lebenstraum der Ida Dehmel. Claassen: München 2000, S. 28. Auch ein Bild von dem Tor des Hauses Coblenz auf S. 29.) ゲオルゲの写真は多く残されているが、それらは全て、完全な自己演出のもと、冷厳な無感情、無表情のポーズで撮られている。しかし、この庭で、父の命により不幸な結婚をしたイーダが撮った2枚の写真に写っているのは、倨傲な青年詩人の姿ではない。ゲオルゲの頬には、儂い微笑みが浮かんでいる。イーダの父やその父祖たち、すなわち「他人の支配する庭」でイーダによって撮られたこの2枚の写真は、ゲオルゲがそのダンディのスタイルを剥がれ、無防備な姿となっている一瞬をとどめている。Cf: Dümmling, Albrecht: a. a. O., S. 87.

Rose pflücke und viole ·
 Dass ich meine wange breite ·
 Schemel unter ihrer sohle.

薔薇や堇を摘み、
 わたしの頬を広げ、
 彼女の足裏をのせる足台としよう。

この第15詩も、第14詩と同じく7行1節だが、韻律はヤンブス5揚格からトロヘウス4揚格へと変化している。高価な絹織や薔薇、堇を彼は彼女の足元に撒き散らし、さらに自らの頬も彼女の踵で踏ませたいと望む。つづく二つの詩は、愛に溺れた挙句、無能に陥った自らへの嘆きである。

Jedem werke bin ich fürder tot.
 Dich mir nahzurufen mit den sinnen ·
 Neue reden mit dir auszuspinnen ·
 Dienst und lohn gewährung und verbot ·
 Von allen dingen ist nur dieses not
 Und weinen dass die bilder immer fliehen
 Die in schöner finsternis gediehen -
 Wann der kalte klare morgen droht.

いかなる仕事についてもわたしはもう死んでも同然。
 御身との語らいを紡ぐため、
 思いを凝らし 御身と呼び寄せること、
 奉仕と報い 許可と禁止、
 あらゆるもののなかで 必要なのはただこれだけ
 そして美しい闇のなかで育った
 絵姿がいつも逃げさるのに涙することー
 冷たく澄んだ朝が迫りくるとき。

「わたし」は想念のなかで「御身」を呼び出し、そのイメージと果てしもない会話を繰り返す。しかし夜を徹して繰り返された夢想も、冷涼な朝の光には堪ええず、雲散霧消する。それは何事かを成し遂げ、確固としたものとする仕事 *werke* とはかけ離れたものである。8行1節、全体にはトロヘウス5揚格が主調になっているが、第5・6行目のみはヤンブスに変調している。脚韻は *AbbAAccA* という抱擁韻で、*-ot* という男性韻が半分の4行で用いられている。

次の第17詩は7行1節、トロヘウス5揚格で、5行目のみ4揚格。脚韻は全て女性韻の *abbacc* で、4～7行はすべて „*dass*“ により始まっている。

Angst und hoffen wechselnd mich beklemmen ·
 Meine worte sich in seufzer dehnen ·

不安と希望がこもごも胸を締めつけ、
 ことばは間延びしてため息となる、

Mich bedrängt so ungestümes sehnen	かくも激しい憧れに悩むあまり
Dass ich mich an rast und schlaf nicht kehre	休息も眠りもとる気になれず
Dass mein lager tränen schwemmen	我が臥所は涙にひたる
Dass ich jede freude von mir wehre	わたしはどんな喜びも避け、
Dass ich keines freundes trost begehre.	友の慰めも聞く気にならぬ。

第 16 詩でも、この第 17 詩でも、「仕事・作品」werke,「絵姿・イメージ」die bilder や「ことば」worte といった詩に関わる語彙が現れ、その無力化が嘆かれていることに注目しておかねばならない。王国を支配する権力と、詩の創作力が、これらの詩では二重写しになっており、それが愛への惑溺によって弱体化していくことが嘆かれるのである。その無力の底からほとばしるように、欲望の訴えが、それでもなお形式性（トロヘウス 5 揚格、3・8 行目のみ 4 揚格、脚韻は abcd dabc）を保ったままに、発される。

Wenn ich heut nicht deinen leib berühre	今日御身の肉に触れなければ
Wird der faden meiner seele reissen	我が魂の糸は切れるだろう
Wie zu sehr gespannte sehne.	引き絞りすぎた弦のように。
Liebe zeichen seien trauerflöre	愛の徴は喪のヴェール
Mir der leidet seit ich dir gehöre.	御身の虜となり悩みに落ちてからは。
Richte ob mir solche qual gebühre・	この苦悩が相応しいのか裁きたまえ、
Kühlung spreng mir dem fieberheissen	熱にうかされるわたしを冷ましたまえ
Der ich wankend draussen lehne.	よろめきつつ外でもたれ立つわたしを。

第 14 詩で「わたし」を引き止めた徴^{しるし}が、この第 18 詩では「喪のヴェール」と呼ばれる。「わたし」はもはや愛の徴だけでは満足できず、情欲に苛まれている。第 4 詩では勝利の儀式の享受のため、また第 9 詩では聖性の誇示のため斥けられた「肉」leib が、この詩ではあられもない懇願の対象となり、苦しみや死の脅しというネガティブな訴えにより、「わたし」は欲望を受け入れるよう「御身」に迫る。

この詩について、後年イーダ・コブレンツは次のような回想を記している。

彼（ゲオルゲ）はとある午前中に『架空庭園』、即ちわたしと最も密接な親縁関係にある詩篇を持参しました。それをわたしに朗読し、かれは手稿をふたたび持っていきました。まだわたしのために書き写していなかったからです。数日後、わたしたちは共通の女友達のところへ連れだって行きました。この女友達をわたしは彼のために時間をかけて獲得したのです。彼女もまた新しい詩を知ることができるようにと。彼は詩を朗読し、わたしはこう言いました。「言葉をひとつ変えましたね。」ゲオルゲの顔には一条の光が射しました。わたしの耳には彼の詩を受け入れる能力があり、彼の詩はわたしの心に銘記されていたのです。数年後、ゲオルゲがこの詩の二つ目の写しを雑誌「牧羊神」Pan のためわたしに送ってくれたとき、彼はこう書いていました。

「覚えていらっしゃるでしょうか？ あのときあなたには変えたもののほどはお気にめさなかったあの言葉が、ふたたびここには書かれています。この方が生彩があり、周りとも適合するからです。」¹⁶⁾

この言葉こそ、この第18詩の「肉」leib だった。Boehringerはこの経緯について次のように記している。「最初に朗読したとき „Leib“ という言葉が彼女（Ida）の気に入らなかったと思い、彼（George）はそれを変えた。しかし後にふたたびその言葉を採用し、彼女に写しを送付したとき、彼は彼女に追伸でこう書き送ったのである。（中略）後に、わたし（Boehringer）に彼女（Ida）は、その言葉に反対したわけではなく、ただ言葉を変えたことが気になったのだ、と語った。」¹⁷⁾ イーダ・コブレンツが „leib“ という言葉が変えられたことを指摘したとき、ゲオルゲの顔が輝いたのは、ゲオルゲが彼女に伝え、渡したかつ

16) Dehmel, Ida : a. a. O. S. 80 f.

17) Boehringer, Robert : a. a. O., Band 1, S. 61.

たのがまさにこの言葉であり、その言葉を彼女が聴き取ったことが彼女自身の声で彼に伝えられたからだろう。それは詩の形でしか表し、伝えることが許されない、彼の最も肉内的な肉声であったように思われる。最初に彼女の前でこの詩を朗読したとき、彼女が何も言わないままに、ゲオルゲはその言葉が彼女の意に染まなかったと感じた。露わに過ぎたと思ったのかもしれない。そして「肉」leibを「手」handに変えた¹⁸⁾ 共通の女友達をまじえた2回目の朗読の際に、ゲオルゲはこの異稿を、何の注釈も加えず読み上げた。そのときイーダ・コブレントツは、言葉が変えられたことを指摘した。「今日御身の肉に触れなければ／我が魂の糸は切れるだろう」という初稿の詩行は彼女に聞き届けられ、彼女の記憶に留められていたのである。その後ゲオルゲは、「手」をふたたび「肉」に戻す。そして、その間に既に良人を持つ身となっていたイーダに対して、慎重をもって「あのときあなたには変えたものほどはお気にめさなかったあの言葉」と述べつつ、それが、「ふたたびここには書かれています」と注意を喚起するのである。

この詩は、枠内詩である「セミラミスの歌」15篇の中では第8篇、即ち中心の位置を占める。トロヘウス5揚格（第3・8行目のみ4揚格）、女性韻という形式を保った激情の吐露のあと、「セミラミスの歌」は急激に欲望の成就へと向かう。

Streng ist uns das glück und spröde ·
Was vermocht ein kurzer kuss ?
Eines regentropfens guss
Auf gesengter bleicher öde
Die ihn ungenossen schlängt ·
Neue labung missen muss
Und vor neuen gluten springt.

わたしたちには幸福は厳しくもろい、
みじかいくちづけが何になったろう？
それは白く焼け焦げた荒れ地に降る
雨のひとしづく
荒れ地は味わいもせず飲み込み、
新たに元気づけてくれるものもないままで
新たな灼熱にひび割れる。

18) Oelmann, Ute : Varianten und Erläuterungen. in : SW, Bd. 3, S. 144.

注目すべきはこの詩で初めて「私たちに」uns という言葉が使われていることである。「くちづけ」kuss は過去形とともに用いられている。第18詩にはなかった結びつきが既に生じているが、それは欲望を鎮めるのではなくさらに掻き立てる。欲望は乾いた大地に例えられ、短い逢瀬では到底それを潤すことはできない。

7行1節、トロヘウス4揚格のこの第19詩のあと、ゲオルゲ編集の全集版詩集では、詩1篇分の空白が置かれている¹⁹⁾ この書かれざる空白の部分、愛の成就に当たると、多くの評者は解釈している²⁰⁾「情欲的・官能的なものに対する忌避感と厳格な芸術観は、恋愛関係の成就の瞬間を夢の形ですらあからさまに直接名指し、描写することをゲオルゲに許さなかった。」²¹⁾ この空白のあとに置かれているだけに、次の詩を単なる叙景と解釈することはできない。

Das schöne beet betracht ich mir im harren ·
Es ist umzäunt mit purpurn-schwarzem dorne
Drin ragen kelche mit geflecktem sporne
Und sammtgefederte geneigte farren
Und flockenbüschel wassergrün und rund
Und in der mitte glocken weiss und mild -
Von einem odem ist ihr feuchter mund
Wie süsse frucht vom himmlischen gefild.

美しい花壇をまちこがれつつわたしは見つめる、
それは深紅の茨に囲まれ
その中にまだらの距のあるうてなが伸びる
ビロードの毛を生やしたうつむく羊歯
緑水色のまるいひと房の綿
まんなかには白くやさしい鈴蘭ー
息づくたび その濡れた口は
天の園の甘やかな果実のよう。

この園生の中の庭、花壇は茨に囲まれている。すなわちこの庭は、初めは「閉ざされた園」つまり聖母の庭を連想させる。しかしこの花壇は行を追うにつれ、

19) George, Stefan : Gesamt-Ausgabe der Werke, 3. Bd. Otto von Holtzen : Berlin 1930, S. 108 oben.

20) Morwitz, E. : a. a. O. S. 97 u. 100, Dümling, A. : a. a. O. S. 100 f., 富岡近雄「ゲオルゲの詩集『架空庭園の書』をめぐって」『ユリイカ』青土社, 1996年4月号, 116-117頁。

21) Dümling, A. : ebenda.

いわゆる「愛の園」へと変奏され、最終行で天国の庭へ昇華されていく。この詩では、庭園に関する西欧の伝統的観念が幾重にも重ねられている。しかしその中心となっているのは、「愛の庭」である。『雅歌』の昔から庭園は愛する女性、あるいは性愛そのもののアレゴリーとして詩に歌われた。「それはもはや聖なる林苑ではない、というか別のものなのである。つまり、聖なる林苑は今や彼女の肉体的な魅力、とりわけ彼女の膝〔陰部〕である。したがって、それは庭から庭への道の終わりにあるきわめて個人的な庭であり、これまでは閉ざされていたが、今や恋人がそのなかに入るにふさわしいような庭である。』²²⁾ ゲオルゲはこの伝統に則り、8行1節、ヤンブス5揚格のこの第20詩で、花壇の花ばなど、聖母のイメージをも負わされた恋人の肉体を、重ね合わせるように描いている。²³⁾

この一瞬の幸福のあと、詩集は一気に別離と凋落へと向かう。

Als wir hinter dem beblühten tore
Endlich nur das eigne hauchen spürten
Warden uns erdachte seligkeiten?
Ich erinnere dass wie schwache rohre
Beide stumm zu beben wir begannen
Wenn wir leis nur an uns rührten
Und dass unsre augen rannen -
So verbliebest du mir lang zu seiten.

花飾りの門のかけで わたしたちが
ついに自分たちの息だけを感じたとき
思い描いていた至福は成就したのか?
思い出すのは そっと触れあったとき
かよわい葦のように
ふたりが黙って震えはじめたこと
そしてふたりの目のしずくだけー
あなたはずっとわたしに寄り添っていた。

時制は過去となり、愛の成就の回顧は、それが期待された「至福」 seligkeiten

22) ヴォルフガング・タイヒェルト「愛の園」。同『象徴としての庭園』（岩田行一訳）青土社、1996年、103頁。

23) この詩が女性の肉体のアレゴリーであることについては、以下を参照。Lachmann, Eudurd: Die ersten Bücher Stefan Georges. Eine Annäherung an das Werk. Bondi: Berlin 1933, S. 92 f.; Morwitz, Ernst: a. a. O., S. 100; Dümling, Albrecht: a. a. O., S. 97 f.; 富岡近雄, 同論文, 116-117頁。

をもたらしたのかという疑いと悔恨を既に含んでいる。そのときの慄きや涙が何ゆえだったのか、意味づけは回避されているが、はかなさと脆弱さの中ふたりは抱きあうこともなく、ただ傍らに寄り添うのみである。この前の詩から8行1節の詩が4篇連続するが、韻律はそれぞれ異なる。この第21詩は主にトロヘウス5揚格で構成されているが、4行目は抑格が1シラブル多く、6・7行目は4揚格と、形式的には不安定である。

Wenn sich bei heilger ruh in tiefen matten	深い褥のなか 聖なる静けさのうちに
Um unsre schläfen unsre hände schmiegen ·	たがいのこめかみに手を添えていると、
Verehrung lindert unsrer glieder brand :	思慕がわたしたちの四肢のほてりを鎮める。
So denke nicht der ungestalten schatten	だから考えるのはやめなさい
Die an der wand sich auf und unter wiegen ·	壁を上下にゆらめく異形の影のことを、
Der wächter nicht die rasch uns scheiden dürfen	わたしたちをすぐに引裂ける夜警のことを、
Und nicht dass vor der stadt der weisse sand	そしてわたしたちの温かな血を吸ろうと
Bereit ist unser warmes blut zu schlürfen.	街の外に白い砂が撒かれていることを。

情交ののち、互いに触れ合いながら同衾しているときも、思いはつい、いまこの幸福ではなく、暗い将来へと向かう。壁には窓越しに松明をもつ衛兵の影が揺らめき、このふたりを捕らえ、引き裂く権限を主人に与えられている夜警が、いつ寝室に侵入してくるかも分からない。密通の発覚のもたらす処刑の場が、すでに街の外の刑場にととのえられているという想像を、ふたりは振り払うことができない。他者の支配のもと、情交は死をともし禁止の命令に晒され、別離と破滅の相が、寝室の中をも圧倒している。二人の愛や欲望よりも、この禁止は上位の審級にあり、侵犯への懲罰に抵抗する手段はなく、刹那への専念と諦念に似た無力感が漂う。この第22詩と次の第23詩はともにヤンブス5揚格の安定した韻律を持っている。

Du lehnst wider eine silberweide

あなたは岸辺の銀柳にもたれ、

Am ufer mit des fächers starren spitzen	扇のぎざぎざの先端で
Umschirmest du das haupt dir wie mit blitzen	まるで稲妻のように頭を覆い
Und rollst als ob du spieltest dein geschmeide.	戯れるように装身具をまさぐっている。
Ich bin im boot das laubgewölbe wahren	私はこんもりとした繁みに隠れた小舟に乗り、
In das ich dich vergeblich lud zu steigen..	あなたを乗せようとうむなく招く…
Die weiden seh ich die sich tiefer neigen	柳がさらに深く垂れ下がり
Und blumen die verstreut im wasser fahren.	水面に散った花が流れてゆくのを眺めながら。

ふたりは寝所から出て庭園にいる。「私」は、繁みに隠された小船に乗り、女に同乗するよう呼びかけるが、彼女は岸边に留まり、呼びかけに応じようとはしない。女は扇で顔を隠し、宝飾をまさぐっている。ますます深く垂れ下がるように見える岸边の柳、流れ行く落花は、凋落と流竄を思わせる。詩集第二部の冒頭の第11詩、第12詩において、主人公は水流をたどるように架空庭園の中心部へ導かれた。ふたたび水辺を描くこの第23詩で、男が女を残し架空庭園から逃れ去ることが暗示される。

Sprich nicht immer	繰言はやめよ、
Von dem laub ·	風にさらわれた
Windes raub ·	木の葉のこと、
Vom zerschellen	熟れたマルメロが
Reifer quitten ·	爆ぜたこと、
Von den tritten	年の瀬の
Der vernichter	破壊者の
Spät im jahr.	足音のこと。
Von dem zittern	雷雨の中
Der libellen	震えていた
In gewittern	とんぼのこと
Und der lichter	不安定に
Deren flimmer	またたく
Wandelbar.	ゆらめく光のこと。

第22詩の「考えるのをやめよ」と同じく、この第24詩では「いつも同じことを言うのはやめてくれ」という命令が女に向かって発される。禁止すべき話題として引用されるのは、晩秋の情景である。風に攫われる落ち葉や、熟しきって爆ぜたマルメロ、嵐の中の蜻蛉に託して、止めようもない時の移ろいと、滅び、破綻、死を前にした慄きが語られる。冬もしくは雪は、「破壊者」vernichterと形容される。第二部冒頭の第11詩では灌木に点される蠟燭の明かりが主人公を導いたが、第二部の終わりに二つ目のこの詩では、禁を犯したものを追う松明のほのめきが、語らざるべきこととして詩の終結部で言及される。この詩はトロヘウス2揚格14行1節という特異な韻律を持ち、ゲオルゲの作詩の技巧のほどを物語っている。

Wir bevölkerten die abend-düstern
 Lauben· lichten tempel· pfad und beet
 Freudig - sie mit lächeln ich mit flüstern -
 Nun ist wahr dass sie für immer geht.
 Hohe blumen blassen oder brechen ·
 Es erblasst und bricht der weiher glas
 Und ich trete fehl im morschen gras ·
 Palmen mit den spitzen fingern stechen.
 Mürber blätter zischendes gewühl
 Jagen ruckweis unsichtbare hände
 Draussen um des edens fahle wände.
 Die nacht ist überwölkt und schwül.

わたしたちは集^{つど}った、夕暮れの園亭に
 あかるい寺院に、小道と花園に
 心喜び―彼女は微笑みわたしは囁いた―
 今 明らかに 彼女は永遠に去った。
 咲き誇る花は萎れ ぐず折れ、
 池の硝子は青ざめ割れ
 わたしは朽ち果てた草原に迷い込む、
 棕櫚はその尖った指で刺す。
 エデンの青ざめた壁の外では
 かさこそ音をたてる朽葉の群れを
 見えない手が追いつ立てる
 夜は雲に覆われ 鬱陶しい。

第二部の最後にあたるこの第25詩は、過去形による回顧に始まり、第4行で現在形による別離の認識に引き継がれる。女を置いてこの庭園を去るのは男の方なのだが、「彼女は永遠に去った」と顛倒した認識が示されている。第5行の「咲き誇る花」は、第20詩で花壇になぞらえられた女を、第6行の池に張った氷は、水脈を通してこの庭園に至り、去ることになる男の象徴であり、同じ

(er)blassen, brechen という動詞によってその痛みが共通であることが示される。第12詩では「花咲く草原」blütenwiese だった庭園を取り巻く自然は、「朽ち果てた草原」das morsche gras となる。第2詩では彼を王国へ招いた棕櫚の葉が、この詩ではその尖った葉先で彼を庭園＝楽園から追い立てる。楽園の外では落ち葉が冬の風に吹かれている。12行1節のこの詩は、トロヘウス5揚格で描かれているが、異様なことに最終行のみヤンブス4揚格に転調している。

5. 第三部：没落

第三部は6篇の詩によって構成され、枠の後半部を成している。第二部で描かれた庭園を去った主人公は王国に戻るが、しかしそのときはもはや、本人も、世界も、元のままではない。

Des ruhmes leere dränge sind bezwungen
Seit einen schatz es zu bewahren gilt
Den ich nachdem ich viel verlor errungen
Der jeden durst nach andrem prunke stillt.

名声への空しい希求は克服された
多くを失ったのち勝ち獲た宝
あらゆる他の奢侈への渴望を癒してくれた宝を、
守ることこそが大切になってからは。

Die hände zum gebieten ausgestreckt
Vergassen ihre kräfte zu erproben
Weil sie vor dir von deinem glanz bedeckt
In heidnischer verzückung sich erhoben

命ずるために伸ばされた両手は
その力を試すことを忘れた
御身のまえて御身の栄光に包まれ
異教徒の恍惚のなかで掲げられたからには

Und seines amtes heiligkeit verlegt
Der mund der scherwort spendet
Seit er sich neigend einen fuss benezt
Der milch und elfenbein im teppich blendet.

そして見者の言葉を授けていた口は
その職務の聖性を傷つけてしまった
身をかがめ 絨毯の中の乳と象牙を
目くらますばかりのおみ足を濡らしてからは。

かつて支配者であった彼は、愛欲に溺れるうちに、名声や豪奢への渴望も、権勢も、予言者の言葉も失ってしまった。女への愛はその権力への屈服であり、その魅惑は「宝」*schatz* と名づけられるが、それを獲得するために王は多くのものを失わねばならない。女は、王自らの王権に対立する敵対的存在と捉えられているのである。女への讃仰は自分本来の価値とは異なる「異教徒的な恍惚」*heidnische verzuckung* であり、女の足に接吻することは、王の口から発される言葉の聖性を汚すこととなる。4行3節のこの第26詩は、ヤンプス5揚格(10行目のみ4揚格)、男女性韻交替の交叉韻で構成されている。

Indes in träumen taten mir gelungen ·
Ich zarter weisen mich beflissen ·
Sind die feinde in mein land gedrungen
Sie haben bis zur hälfte mirs entrissen.

夢の中ではやさしくふるまうことが
うまくいっていたのだが そのあいだに
敵はわたしの国になだれ込み
わたしから半分を奪ってしまった。

Ich aber kann mich nicht zur rache rüsten ·
Zum lezten male war ich held
Als man mir die verräter von den küsten
Herbeigeführt ins rote richterfeld.

しかしわたしは復讐のために武装できない、
最後にわたしが英雄であったのはあの時だ
わたしのものと裏切り者たちが海岸から
朱に染まった裁きの場に牽き出された。

Da konnt ich unverwandt noch blicken
Wie sie die nicht gehorsam mir gezollt
Zu boden lagen und auf jedes nicken
Vom glatten schlanken rumpf ein haupt gerollt.

あの時はまだ目を逸らさず見ることができた
従順にわたしに敬意を払わなかったものたちが
床に横たわり うなづくごとに
滑らかな痩せた体から首が転がるさまを。

Ich muss mein schönes land gebeugt betrauern ·
Dieses sei allein mein trost :
Der sänger-vogel den zertretne fluren· mauern
Und dächer· zügelnd wie ein feuerrost ·
Nicht kümmern singt im frischen myrtenhage
Unablässig seine süsse klage.

わが美しの国を屈従して悼まねばならぬ、
わが身のたったひとつの慰めは
歌人鳥が 踏み荒らされた玄関の間も、壁も
残り火のように、ちらちらと燃え上がる屋根も、
気に病むことなく 新緑の銀梅花の森で
たえまなく その甘い嘆きを歌っていること。

愛欲に現を抜かしている間に、国土の半分は奪われたが、かつての王は反撃に立ち上がることもできない。今は失われた絶対権力を愛惜しつつ彼が回顧するのは、かつて彼の権力に従わなかった者達が、彼の目前で刎首された惨たらしい光景である。この回顧には詩の中心部の2節が当てられている。第3節までは4行詩節なのだが、最終節は6行で、詩行も主にヤンブス4～5揚格だが、第3・14・18節はトロヘウス4～5揚格となっており、形式的には破格である。その最終節では、荒廃した宮殿のありさまと、今や打ちひしがれて国の滅亡を悼むばかりの王の唯一の慰めが、蹂躪された王宮に頓着することなく甘い嘆きの声で歌い続ける「歌人鳥」der sänger-vogelの歌声であることが示される。絶対的権力は、わずかな領きだけで裏切り者に死を齎す力と匿名(man)の機構に集約される。第8詩では白い鸚鵡が王宮の安逸と無聊の中で叫びも歌いもしなかったのに対して、この第27詩では没落した王を、歌人鳥が嘆きの歌で慰める。こうして彼は王宮を去ることになる。

Ich warf das stirnband dem der glanz entfloh
 So dass es klirrte hin und satt verliess ich sie :
 Den saal in den der süden seine schätze räumt ·
 Die höfe wo das wasser duftig spielt ·
 Der säulenmauern erz und lazuli
 Und meinen thron -
 Und ging zu dienen einem pascha der befiehlt
 In einer Schiras die in rosennebeln träumt.

私は輝きの失せた額飾りをカチャリと
 投げ棄て 飽きあきして立ち去った、
 南国が宝物を収めている広間、
 水霧の戯れる中庭、
 円柱壁の青銅と天藍石
 わが王座を後にしてー
 そして薔薇の霧の中で夢見るシーラスを統べる
 バシヤに仕えるために旅立った。

Ich freute ihn in langen wochen treu
 Durch jubellieder die ich ihm gesungen ·
 Durch kränze die ich für ihn flocht ·
 Ich beugte mich zu ihm herab voll scheu ·
 Zu ihm der alle meuterer bezwungen
 Und viele fremde gegner unterjocht.

何週間も忠実に私は彼を喜ばせた
 彼に寄せる讃歌を歌い、
 彼のために冠を編み、
 恐懼して彼に頭を屈めた、
 全ての謀叛者を屈伏させ
 数多くの異国の敵を制圧した彼に。

An einem siegesabend war er heimgekommen Das volk umgab ihn wie der brandung saus · Ich hatte einen dolch für ihn geschliffen : Er stirbt sobald das wachs erlischt - Doch als er kaum die stiegen gross und stolz erklommen Und ich den ehrentrunk für ihn gemischt : Hat eine neue reue mich ergriffen · Ich schleiche blass und stumm hinaus.	戦勝祝賀の夕辺 彼は帰還した 民衆はどよめく波のように彼を囲んだ、 わたしは一振りの短剣を研いでいた。 蠟燭が消えるとともに彼は死ぬことになるー でも階段を威風堂々と上ってくる彼に 栄誉の飲料を調合するのも済まないうちに、 あらたな悔恨がわたしを襲い、 蒼白に黙したまわわたしはひっそりと外へ出た
In allen strassen und palästen dröhnen Die pauken und die zimbeln im verein Und wein und liebe lohnt den tapfern söhnen · Sie schmücken mit geraubter pracht Die töchter deren lippe glüht und lacht Im garten bei der fackeln gelbem schein.	あまたの街路 宮殿では 一同に ティンパニーとシンバルが鳴り響き 葡萄酒と愛とが雄々しい息子たちをねぎらう、 彼等は略奪した財宝で 燃える唇で笑う娘達を飾りたてる 松明に黄色く輝く庭で。
Der sklave geht· noch einmal kurz vorm tore Will ihm ein strauch der breite bunte blüthen trug Vom ruhme lispeln· von der schmach · Er aber traut nicht mehr dem lug · Er bricht den zweig von einer sykomore Und flieht den ort wo seine seele brach.	奴隷は行く、もう一度しばらく門の前で 大きく色鮮やかな花盛りの灌木が 名誉と汚名について囁こうとも、 彼はもはや偽りは信じない、 いちじくの枝を折ると 彼は こころ破れた土地から逃げ去った。
Der sklave geht· sein werk ist all geschehn. Zum strome wo die sterblichen versinken Und gläubig aller qual erlösung trinken - Er kann der woge jezt ins auge sehn.	奴隷は行く、彼の業はすべて成った。 死すべき者が身を浸し 敬虔にあらゆる苦悩からの救いを飲む川へー 彼はいまや大波を直視することができる。

この第28詩は詩集の中で最も長く、8行、6行、8行、6行、6行、4行の6節38行よりなり、ヤンプス2～6揚格と詩行も変化に富む。王宮を捨てた彼はペルシアの都市シーラスを訪れ、その地を統べるパシャに伺候する。パ

シャに寄せる讃歌を歌い、冠を編む一方で、彼はパシャを暗殺するための刃を研ぐ。凱旋の夜、暗殺を目前に、彼はしかし、パシャの威風堂々とした姿を目の当たりにし、悔恨に打ちひしがれ宮殿を逃亡する。戦勝を祝う都市を一人抜け出し、市門の外で名誉と汚名について再考して、それを虚妄と喝破した彼は、入水の間へと向かう。

命令する言葉の権威を失ったかつての王は、パシャを讃える歌人として仕える。このオリエントの世界では、人間関係には支配か臣従のいずれかしかなない。王から従者へ転落したものの、暗殺による権力の顛倒是可能性として残されていた。しかしパシャの威光に打たれて暗殺を断念することによって、彼はパシャの権威を認め、従属的地位を内面化した。第1節から第3節までは一人称が用いられ、かつての王が詩の語り手となっている。第4節は一人称を含まない街の描写だが、パースペクティヴはかつての王に置かれている。しかしこの第5節以降、かつての王は「奴隷」と呼ばれ、3人称で描写される。その彼に対して、「彼の業はすべて成就した」とこの詩は結論づける。

Wo am letzten rastort reiter
 Und geschmückter züge leiter
 Spähen nach erreichten zinnen :
 Stillen wanderer ihr dürsten ·
 Bieten wasserträgerinnen
 IHM den krug und grüssen heiter ·
 Niemand kennt den frühern fürsten.
 Lächelnd dankt er · kein erbittern
 Ist in ihm · doch flieht er weiter
 Scheu weil seine hoheit bricht ·
 Jede nähe macht ihn zittern
 Und er fürchtet fast das licht.

最後の休息地 騎手たちや
 着飾った行列の先導者が
 到達した尖峰を見晴らす、
 遍歴者は渴きをいやし、
 水運びの女たちは
 彼に壺を渡し 朗らかに挨拶する、
 前の王を知る者は誰もいない。
 微笑んで彼は感謝する、怒りのかけらも
 彼の内にはない、しかし威光を失った
 彼はもの怖じて避け続ける、
 誰が近づこうとも彼は震え
 ひかりをも恐れるばかり。

都市を逃れた彼は死地へ赴く。その途中の休憩所で彼は水汲みの女から水壺を

渡される。落魄した彼がかつての王だったことに気づくものは誰もいないが、それでも彼は人目を避け、光をも恐れる。12行1節トロヘーウス4揚格のこの詩は、終末部へ至る前の小休止となっている。

Er liess sich einsam hin auf hohem steine ·	かれはひとり高い岩の上に登る、
Schon lag sein land mit gnaden und befehlen	恩寵と命令下にあった彼の国はすでに
Ihm sehr entfernt und schätze und juwelen	かれには遠く 宝物も宝石も
Erschienen wie in tief versenktem schreine	深く沈んだ櫃のなかのように思える
Als er das haupt in seine hände grub.	かれは頭を両の手に埋めた。
Er schwieg - ein seufzen sich um ihn erhuh :	彼は黙しーそのまわりに嘆息が上がった：
Die gräser die betrübt am rande kauern ·	淵に悄然とうずくまる草、
Das zwiegespräch der zedern und der erlen ·	杉と榉 ^{はん} の木の交わす声、
Die lauten tropfen die von felsen perlen	岩壁からしたたる雫の音が
Ergriffen das den menschen fremde trauern	王権を失ったものの
Des der ein königtum verlor.	ひと知れぬ嘆きをとりえた。
Und aus dem strom ein rauschen ihn beschwor :	そして川のせせらぎが彼に訴えかけた：

川淵の高い岩にたどり着いた彼が思うのは、第二部で愛した女のことではない。かつては彼の恩寵と支配下にあった失われた国と、その財宝のことである。絶望して沈黙し、頭を抱え込む彼の周りに、その声なき嘆きに呼応し、代わって嘆息するかのように、崖の草、樹木がざわめき、雫が響きをたてる。自然との照応のなかで、川のせせらぎが彼に訴えかける声となって聞こえてくる。この詩は5行、1行、5行、1行の4節計12行で構成され、主にヤンブス5揚格の詩行をなしている。1行詩節の脚韻は前の5行節の最終行と同じであり、その2行だけ男性韻であることもあって、強く結びついている。1行詩節の終末はそれぞれプンクトではなくコロンとなっており、この第30詩と次

の詩集を締めくくる第 31 詩が内容的に連続していることが示されている。

STIMMEN IM STROM

川の中の声

Liebende klagende zagende wesen
Nehmt eure zuflucht in unser bereich・
Werdet geniessen und werdet genesen・
Arme und worte umwinden euch weich.

愛し嘆き臆するものたちよ
われらの領域に逃げ場を求め、
享受し快癒するがいい、
両腕と言葉がやさしくおまえたちを包む。

Leiber wie muscheln・ korallene lippen
Schwimmen und tönen in schwankem palast・
Haare verschlungen in ästige klippen
Nahend und wieder vom strudel erfasst.

貝の肢体、珊瑚のくちびるが
ゆらめく宮殿に泳ぎ歌い、
髪は枝分かれした岩礁に近づいては
ふたたび渦にとらえられ絡み合う。

Bläuliche lampen die halb nur erhellen・
Schwebende säulen auf kreisendem schuh・
Geigend erzitternde ziehende wellen
Schaukeln in selig beschauliche ruh.

青ざめたあかりは半ばしか照らさぬ、
旋回する柱脚の上に漂う円柱ー
ざわめき震えつつ引いてゆく波は
至福ののどかな静けさのなかたゆたう。

Müdet euch aber das sinnen das singen・
Fliessender freuden bedächtiger lauf・
Trifft euch ein kuss: und ihr löst euch in ringen
Gleitet als wogen hinab und hinauf.

しかし想いと歌、流れゆく喜びの
穏やかな足どりに倦んだときには、
接吻してやろう。おまえたちは水輪の中に解体し
波となり上になり下になり滑りゆく。

第 30 詩の最終行で言及された、せせらぎから訴えかける声がこの詩である。まずは訴えの相手が単数の *du* ではなく複数の *ihr* であることに注目したい。川の中の声は入水しようとしているかつての王だけに向けられたものではない。「愛し嘆き臆するものたち」全てに訴えかけ、第 28 詩で既に言及されたように、苦悩からの救いを求め、水の中に逃れるように誘う。形式的には 4 行 4 節で、この詩集では唯一ダクテュルス 5 揚格で歌われており、ゆるやかなリズ

ムが特徴的である。現在分詞の -(e)nde という語尾が8回繰り返され、3行目では *werdet -sen*, 13行目では *das sin-en*, 16行目では *hin-* という言葉や頭韻が積み重ねられ、催眠的な効果を生んでいる。川は女性的な身体として形象化され、貝、珊瑚、岩礁という硬質な固体も流れの中で肢体や口唇、髪といったなめらかな曲線を持つ柔軟なものと溶け合わされ、流体化される。「ゆらめく」 *schwank*, 「漂う」 *schweben*, 「旋回する」 *kreisen*, 「震える」 *erzittern*, 「たゆたう」 *schaukeln* といった、揺れ動き振動する動詞や形容詞が重複し、全てが揺らぎ、流動し、最終的には、入水という接吻の後、懊悩も歌も解体し、流れに呑み込まれ、波と一体化し、滔滔と流れてゆく。

詩におけるユーゲントシュティールの代表作とみなされている²⁴⁾ この第31詩によって、詩集『架空庭園の書』は閉じられる。

6. 『架空庭園の書』の世界

『架空庭園の書』についての最も浩瀚な研究書『架空庭園の異様な響き』を著した *Albrecht Dümmling* は、この詩集の主人公 *Hauptfigur* について以下のように記している。

かねてからゲオルゲ研究においては「セミラミスの歌」における詩的自我 *das lyrische Ich* の同一性は曖昧であるとの見方が一般的であった。この自我は粹物語における王と同一人物なのであろうか？ ひとつの解決策は、15篇の「セミラミスの歌」を夢の中の夢と見るやり方である。ゲオルゲがオリエントの手本とした作品の中にも頻繁に、同様な関係が粹物語とメルヒェンの間に見られる。そうであるなら「セミラミスの歌」の「私

24) Cf. David, Claude: *Stefan George und der Jugendstil*. in: ders.: *Ordnung des Kunstwerks*. Vandenhoeck u. Ruprecht: Göttingen 1983, S. 128. 助廣剛「文学上のユーゲントシュティール-ゲオルゲの場合」『人文社会科学研究』(早稲田大学理工学部・一般教) 16, 1978, 191 ff.

das Ich」は、王の「夢見た私 das Traum-Ich」ということになる。²⁵⁾

Dümling の言うとおり、杵と杵内詩の連続・あるいは不連続はこの詩集の解釈の根幹にかかわり、しかも一義的には解決できない曖昧さを含んでいる。²⁶⁾ しかし筆者は Dümling と異なり、むしろ杵物語と「セミラミスの歌」の詩的自我を、物語の現実の中の自我と、夢の中の自我というように階層化し、区分しない方がよいのではないかと考える。

第一部の最終詩「平和の夜」の最終節は次のようになっている。

Im dichten dunste dringt nur dumpf und selten	濃い煤煙のなか 時おりかすかに
Ein ton herauf aus unterworfenen welten.	隷属させられた世界から音が立ち上る。

そして第二部の冒頭の詩は次の一節によって始まる。

Wo von sternern feine flocken schneien ·	満天の星から細かい粒子が舞い下りるところ、
Sachte stimmen ihre leiden künden ·	微かな声が嘆きを洩らす、

専制と暴虐の支配する第一部の、荒廃した世界からひっそりと立ち上がる音と、静謐な夜に嘆きを洩らす声が照応する。第一部の王は、戦乱と破壊、支配の愉悦（第3詩）、勝利の享受（第4詩）、神聖冒瀆に至る破壊（第5詩）を経て、己が権力に倦み（第7詩）、無聊を慰めるすべもない（第8詩）。入念に興入れの準備を経た妃も、おそらくは王に触れることがないであろう（第9詩）。第一部を結ぶ第10詩では、王は登場せず、征服され隷属させられる側から荒廃した世界が描かれている。

第二部に描かれた庭園とは、この征服された世界の中に残された、隠れ里の

25) Dümling, A : a. a. O., S. 99.

26) Ernst Morwitz も、この「セミラミスの歌」の主人公が、『架空庭園の書』の第一部の王と同一とみなすべきかは疑問が残る」と記している。Cf. Morwitz, Ernst : a. a. O. S. 97.

ような囲い地とみなすことはできないだろうか。そこは王の権力が直接及ばない「他の主人たちの壮麗なる領地」*anderer herren prächtiges gebiet* (第14詩)である。²⁷⁾このような別の権力関係の支配する庭園の女主人の虜となることで、王は支配権を失い、女主人に愛を請う従者のひとりとなる(第13詩)。

しかしこの庭園を支配するのはこの女主人ではなく、最後まで現れることのない不在の主人であり、女主人はその囲い者に過ぎない(第14詩)。この不在の主人のもと、王と女主人の性愛は禁止の命令下にあり、ふたりの関係は初めから不可能を宿命づけられている(第21・22詩)。

しかしふたりの関係の不可能性は、不在の支配者による禁止だけに由来するとは考えられない。「セミラミスの歌」は、一種の恋愛詩であるにもかかわらず、女の肉体を「愛の園」に凝縮したとおぼしい一篇(第20詩)を例外として、女についての描写は皆無に等しい。ひたすら男性側から、期待と夢想、懇願と欲望、嘆きと疑念、不安と幻滅が語られ、女の想いは、常に禁止をとまなう引用として言及されるのみである。すなわちここでは対等関係のもとでの応酬や対話が一切不在なのである。

すなわち、詩集第一部と第三部で表現された、支配と被支配という関係は、第二部の男女関係でも同じ構造を保っている。第一部での絶対的支配者は、第二部の他者の支配する圏で支配権を喪失し、不在の支配者のもとにある女主人に従属する者という、二重の被支配状態に陥る。欲望は内面化された支配関係のもとで禁止される。欲望とその禁止は拮抗して緊張を生み、抑制の破綻(第18詩)を経て、ひと時の成就を迎える。しかしその時点で、男女間の支配関係は動揺し不安定化する。男は女に懸念や発言を禁止する命令を発し(第22・24詩)、不在の主人の支配下から脱するよう促しもするが(第23詩)、それが不可能なことは両者が了解している。不在の主人による支配は揺らぐことがな

27) その意味で、名称のみならず「架空庭園」は『アルガーバル』の「地下王国」と対蹠的な位置にある。後者は「『かれ(アルガーバル)以外の誰の意志にも従わない／彼が光と天候を指令する世界』である。Cf. George, Stefan: SW 2, S. 60.

いのである。破戒のもとらす死の脅威のもと、ふたりの関係は崩壊し、男はこの他者の支配する圏を、傷心し絶望して去ることとなる（第25詩）。

しかしひとたび他者の支配を甘んじた者は、以前と同じ権力を振るうことはできない。軍勢を指揮する腕も、予言の言葉を発する口も汚され（第26詩）、権威を失った彼の王国は既に半分を奪われ、やがて宮殿も陥落するに至る（第27詩）。そのときかつての王が愛惜するのは、失った女性との関係ではない。それは宝とも呼ばれるが、自らの権威を汚したものとして否定される（第26詩）。彼が思い返すのは、死を恣^{ほしいまま}にした絶対権力であり（第27詩）、彼の恩寵と命令のもとにあった国とその財宝である（第30詩）。暗殺しようとしたパシャの権威に圧倒され、彼は内面的にも奴隷に零落し、死を決意する（第28詩）。死を直前に、周囲の草木や岩肌の雫が彼の嘆きに呼応する（第30詩）。最終詩は、死の形象化として、全てを呑み込み、ひとつに溶け合わせる流れからの、エロティックな誘惑の声となっている。それは第二部では維持されなかった、性愛による主客の融合、主体の解体を、死という別の支配者のもとで叶えようとする誘いともみなすことができよう。

Dümling はまた、以下のようにこの詩の主導概念について語っている。

（「セミラミスの歌」をロマン派の伝統に基づく単純な恋愛詩とみなす）見方はセミラミスの歌を粹物語のコンテクストから外す場合にのみ成立する。ここで試みようとする解釈はそれに対して、トーマス・マンがそれによって世紀末芸術と帝国主義の関係を特徴づけた「力によって護られた内面性」*machtgeschützte Innerlichkeit* という主導概念 *Leitidee* のもとで、まさに中核の詩と粹物語のコントラスト、すなわち庭園における愛と征服者の残酷さのコントラストを観察の中心におく。粹物語と関係づけてはじめて『架空庭園の書』が帝国主義時代の文学現象、すなわちエキゾチスム現象に所属していることが明らかになるのである。²⁸⁾

Dümling の言うとおりに、この詩集から「セミラミスの歌」のみを切り離して解釈しては、「セミラミスの歌」を誤読することにつながるだろう。Dümling がトーマス・マンから引用した「力によって護られた内面性」を敷衍すると、この詩集で表現されているのは、性的欲望が、絶対権力すら無力化し、新たな権力関係の中に組み入れ、解体するという主題である。第一部において、王はその権力のもと、性的欲望を消費し、制御し(第4詩)、抑制していた(第9詩)。しかし第二部において、王は他者の支配する圏内に入り込み、欲望に蹂躪されることによって、権力を喪失し、他者の支配権に組み入れられる。そこではそれまで「力によって護られ」ていた内面性が、その防御を剥ぎ取られ、性的欲望が露出する(第15・18詩)。欲望の充足の瞬間のみ、権力は平衡状態となり、楽園的観照が生じる(第20詩)。しかし至福は持続することはなく、人は楽園から追放されねばならぬ。その時点で、かつての権力は既に無効化され、解体されている。欲望または愛欲とは、まさにこのような体験であるかもしれない²⁹⁾。そして王における王権と没落が、詩人にとっての言語に対する専制的権力と詩的言語の力についての確信、言語の無力および言語危機に重ねあわされていることは、「子供の王国」における言葉の力(第6詩)、鬱屈した王の飼う唄わない鸚鵡(第8詩)、セミラミスの庭園における言葉の無力化の嘆き(第16・17詩)、見者の言葉を授けていた口の瀆聖(第26詩)、歌人鳥の嘆き(第27詩)、従者に零落した王のバシャへの讃歌(第28詩)、没落した王の死を前にした沈黙(第30詩)などを見ても明らかである。イーダ・コブレンツによって引き起こされたその体験を、オリエンタリズムの仮面と詩に於ける形式性という二つの戦略をとることによって、ゲオルゲは作品化したのである。

28) Dümling, Albrecht : a. a. O., S. 60.

29) このような欲望から無縁なものがあるとするれば、それは性的な欲望が発生する以前の純粹な権力意志よりなる「少年の王国」と、性的な意匠をまといつつ死による融解を誘惑する「川の中の声」である。